

戦国文字「陳」等に於ける「土」は意符か

野原将揮

1.はじめに

戦国時代は表記される文字字形が地域によって異なり、字形が多様化した特殊な一時期と言えるだろう。戦国文字「陳」に於いても例外ではなく幾つか異なった字形が見られる。何琳儀(1998)によると、秦系・三晋系は「陳」を「阜+東」に作る。一方、斉系は「阜+東+土」に作る。斉系には秦系・三晋系と異なり「土」が付加されているという点にその特徴がある。斉系に於いて、この「土」は「陳」のみに付加されるというわけではない。それ以外の文字にも付加されているのである。また、「土」は斉系の字形にのみ表記されるというわけでもない。他の地域の字形にも「土」が表記された字形が現れることもある。小稿では戦国文字(特に斉系)に現れる「土」が担っているその役割について考察したい。また、小稿で論じる「土」が付加される字形は『説文』小篆古文には見られない戦国文字字形に限る(主に斉系、楚系文字に見られる繁雑化の一種としての「土」に限る)。

2.意符「土」

許慎によって著された『説文』小篆「陳」には「土」は表記されていない。それだけではなく、『説文』古文にも「土」は見られない¹。許慎が「土」が表記された「陳」を目にしていなかったため、『説文』では論じられていないと予想するのが妥当だろう。仮に許慎が「土」を持つ戦国文字字形を見たことがあるとすれば、『説文』古文に記載していたに違いないからである。小稿で問題とするのは、果たしてこの「土」が一体何を表わしているのかということである。

「陳」の左側部分——「阜」——は、『説文』で「阜、大陸山無石者象形(石の無い山)と解かれており、また『釋名』では「土の山」とされている²。『説文』の「石の無い山」は転じて「土の山」と看做すことができ、『釋名』に於いても「土の山」とされていることから「阜」には本質的に「土」の意味が込められていることが分かるだろう。つまり斉系「陳」は、本来「土」の意味を含む「阜」に更に重複して意符「土」を付加しているのである³。そういったことから「土」を‘重複した意符’と考えることは妥当である。実際に、例えば「郭」のように「阜」ではなく「邑」を持つ字形は、「邑」が「土」という意味を含まないため、戦国文字

に於いても「土」が付加される例は管見の限り見あたらない。要するに「阜」という本来「土」の要素を備えた字であるからこそ「土」が付加され得ることとなり、それが‘意符の重複’という結果を招いたのだろう。

しかしながら、「土」を‘重複した意符’であると看做すだけではなく、さらに声母声符の役割を担っていると位置付ける考え方もある。王文耀(2004)は「土」の‘重複した意符’の妥当性を認め、さらに「土」が舌音声符の役割を持つと述べ、「陳」に於ける「東」・「田」・「土」は声母が重複していること指摘している⁴。事実、「東」は端母で、「田」は定母、「土」は透母であり、それぞれ舌音である。

また「陳」以外の字形にも幾つか「土」が表記される例が見られる。楚系「陀」もその一例である。「陀」(小高い丘の意)も上記の例と同様に定母である。以上、「陳」「陀」の2例はどちらも舌音であった。では、その他の文字では如何だろうか。齊系「陽」にも同様に「土」が付加される字形が有る。「陽」は以母で、舌音ではないように思える(Baxter再構音は*/ljang/)。また「陵」(土の大山)は秦系を除く地域で「阜+夂+土」と表記されている。「陵」は来母であるから、舌音の一種である(Baxter再構音*/b-rjɛŋ/)。但し、ここで一言しておきたいことは「陽」が以母で「陵」が来母であることについてである。以母はよく舌音と諧声関係を持つことがある。例えば、以：台や余：途の諧声関係等がある。また来母は破裂音ではないけれども同じ舌音に分類され得るから何かしらの関係を持っている可能性が有る。そういったことから王文耀のように「土」が声母声符の役割を担っている可能性があると考えることができよう。しかしながら、舌音とは何ら関連性のない字もある。例えば、何琳儀(1989)によると、「阿」(大きな丘陵の意)に「土」が付加された例もあるという。「阿」は影母で舌音とは何ら関連性がないのである。

3. 結語

幾つか例を挙げたが、どの字形も「土、丘、山」に関係の深いものが多いように思える。本質的に「土」の意味を持つ「阜」が付加されている字形を例として挙げた為、それぞれの文字が「土」の意味を持つことは当然のことではある。「土」が付加されたひとつの原因として考えられることは、齊系に於いて「阜」には「山、丘」の意味が強くなり、「土の～」という意味が薄れてきた。そこで「土の～」という意味を再び付加させるために敢えて「土」を表記したのではないだろうか。もちろんこれも予想の範囲を越えるものではない。また、文頭で挙げた「陳」は「丘

の意」澄母、「陀」は「小高い丘の意」定母、「陽」は以母で「丘のような意味は持たない」、「陵」は「土の大山の意」で来母である。王文耀のように声母に何らかの繋がりを想像してしまう。しかし、上記した様に影母である「阿」にも「土」が表記されている例があることから声母の関連性については消極的に考えるべきである。

小稿では全ての戦国文字字形を網羅できたとはいえない。今後、更なる仔細な研究を以って、特に斉系で「土」が付加される意味と音との関連性を追及したい。

《参考文献》

何琳儀『戦国文字通論（訂補）』中華書局1989

何琳儀『戦国古文字典』中華書局1998

王文耀『殷周文字聲類研究』上海辭書出版社2004

Baxter William H 1992 *A Handbook of Old Chinese Phonology* Mouton De Gruyter.

1 『説文』「宛丘。舜後媯滿之所封。从阜从木申声。古文(阜+申)」とあり、「土」は古文にも挙げられてはいない。

2 『漢字海』(2006)を参照すると「阜」は土からできている小山、「山」は岩石でできている大山、「陵」は土の大山という区別が有るようだ。「陵」には「阜」が付いているから「土の大山」と為るのだろう。実際に、『説文』にも「陵、大阜也。」と解されている。

3 戦国文字における繁雑化の一種であろう。

4 王文耀(2004)は「阜」と「土」は意符の重複でもあるという考え方にも従っている。また「陳」の声符について、『説文』では「申声」とあるけれども、『史記』「田敬仲完世家」に「敬仲之如齊、以陳字為田氏」とあり、『説文』でも「田、陳也」とされることから「陳」は「田声」という考え方がある。本稿では「陳」の声符については論じない。